鉄砲洲神社　論語素読　解説

（平成 21 年 5 月 15 日）

通 14　子曰く、君子は、食 飽かんことを求むる無く、居 安からんことを求むる無く、事に敏くして言に 慎 み、有道に就きて正す。学を好むと謂うべきのみ。

解説を致します。

孔子が言われるには、学に志す君子・紳士は、贅沢三昧お腹いっぱい食べたり、住まいは便利・快適・豪奢を求めてはいけない。行動は素早く、発言は慎重にして、有識者に自分のやっている事が正しいかどうか常に批判を求める。そういう姿勢で日々過ごす人間は、学を好む人間だと言ってよろしい。

通 15　子貢曰く、貧しくして 諂 うこと無く、富みて驕ること無きは如何と。子曰く、可なり。未だ貧しくして道を楽しみ、富みて礼を好む者には若かざるなりと。子貢曰く、詩に云う、切するが如く磋するが如く、琢するが如く磨するが如しとは、其れ斯を之れ謂うかと。子曰く、賜や、始めて与に詩を言うべきのみ。諸れに往を告げて、来を知る者なりと。

子貢が「貧乏でも卑屈にならない。金持ちでも偉ぶる事はない。そういう人間はどうでしょうか」と孔子に聞きました。

孔子が答えました。「それはいいねえ。しかしまだ、貧乏で学問を楽しむ、金持ちで礼を好む者にはかなわないだろう」

それを聞いて子貢が即座に、「詩経に切磋琢磨という言葉がありますが、それはこの事を言うものですか」と聞きました。

「子貢、お前は素晴らしい人間だ。一緒に詩について語り合う人間だという事が分かった。行く道を教えると、帰り道を自然と分かるような人間だなぁ。」・・・お前は素晴らしい。一を聞いて、二を知る人間であるというような会話です。

通 16　子曰く、人の 己 を知らざることを患えず。人を知らざることを患う。

他人が自分を認めないことは憂う必要はない。自分が優秀な人間を知らないという事を憂うべきである。

表面的な解釈を致しましたので、渋澤論語の中に色々な事が書いてありますので見てみましょう。コピーをつけましたので、ご覧下さい。

通 14 の解説に、「成金が衣食住を極めたり、一晩でべらぼうな金を使って楽しみに耽るというのは、社会の不満がとんでもない所まで来る。階級を打破しようという声も出る」と書いています。

これはどこの時代も同じです。私の友人に、中国との貿易を 40 年くらいかけてやり続けている商社の社長がいます。その人が曰く、上海の高層ビルの上の方にレストランがあって、そこで食事をしようと上っていく時に、レストランの入り口にたむろしていた中国人達が、恨めしそうな凄まじい目つきをして睨んだそうです。そしてモゴモゴと、「月夜の晩ばかりではないぞ。お前らだって、いつ転げ落ちるかわからんぞ。氣をつけないと、いつ我々が刺すかもしれんぞ。」と呟いていたそうです。階級社会の打破というものは、いつの時代も、どこの国も同じだということを感じます。

通 15 の解説には、高崎城の焼討ちを計画し家を出た時、親からお金をもらったわけですが、その事が書いてあります。前回も少しお話しましたが、自分が勘当されて家を出る時に、父親から百両貰って家を出たわけです。しかし、京都に着いて儒学者の塾に入って学生達と勉強していたら、お金が必要であって、一緒に行った従兄弟のお金も自分が払っていたら、一カ月で無くなってしまった・・・と書いてあります。

まあ、よくこれだけ臆面もなく嘘に近い事を書いてあると思います。実際は、百両貰ったけれども、行く先々の旅籠でドンちゃん騒ぎして遊んで、京都では花魁をあげて一ヶ月居続けで派手に遊んだ為に、百両（今の金額で 1 千万円くらい）を２人で使ってしまったのですね。慌てて、どこかに転がり込まなければならなくなって、策略を弄して一橋家に転がり込んだのです。その時に、お金がなくてどうにもならないから 25 両を借りて、毎月一両ずつ返したと書いてあります。お金がありませんから、肉が食べたい時には、一橋家の屋根裏を走り回るネズミを捕まえて食べた、という話を後に孫娘にしたところ、嫌われたという逸話があります。さすがに論語の解説には書いていないなと思いました。

最後に、私の書いた『渋澤論語を読む』のコピーを付けましたのは、切磋琢磨の説明です。私の知り合いに宝石業界の方がおりまして、韓国からお弟子さんをとって、仕込んで、そのお弟子さんが韓国の人間国宝のようなポストになったそうですから、相当な技量を発揮している方です。その方に聞きました。

切磋琢磨というのは、宝石を作る工程だそうです。「切」とは、のみで原石を筋目にあわせて割るのだそうです。「磋」とは、やすりで研ぐ。そして宝石の形にしてきます。「琢」は、打つ。宝石としてかなり形が出来てきて、売りたいと思えば売れます。しかし超一流というわけではない。「磨」は、ダイヤモンドで磨く段階です。ですから顕微鏡で見ても、凹凸が見えないのだそうです。光り輝く完全な一流品となると、素晴らしい値段がつくとのこと。宝石はこういう課程を経るのだそうです。

これを経営者の立場で解釈をすると、「切」は、どんな理由であろうが飛び出す時です。上司と喧嘩をするとか、自分で思いを溜めて飛び出すにしろ、とにかく飛び出した時です。「磋」は、朝早くから夜中まで無茶苦茶に働いている状態です。これは創業型の社長の場合です。無茶苦茶に働いているとだんだんお金も出来てくるし、人様の信用も付いて来ます。しかしまだ荒削りで、欠点が沢山ある。ですから宝石としてみると、まだ売り物にはならない。しかし何か綺麗な原石だと言われる状態です。「琢」は、滅茶苦茶に働いた上に、お金も大分出来てきた。そしてビッグチャンスが転がり込んでくるような可能性を秘めた所まで来る。地域のライオンズやロータリーや同友会に入って、鼻が高くなる。自分でも、よくここまで来たなと思って、目に見えない所で二号さんを囲い始める。そのあたりが「琢」の段階です。「磨」の段階は、経営者としてあの人はたいしたものだと認められる。良い仕事をこなす事によって、次々に良い循環で仕事が入ってくる。なかなかこの段階までいく方は少ないと思います。良い循環が良い循環を生んで次々に仕事が舞い込み、地域としてナンバーワン、お金も順調に残ります。良い友人関係も出来てきます。経営者としてトップレベルに入ってくる状況です。

切磋琢磨は、人間が人間として成長していく、経営者が経営者として成長していく段階で、時々、自分は飛び出したばかりだから「切」だなあとか、無茶苦茶に働いているだけだから「磋」だなとか、二号さんを囲いたいと思い出したから「琢」かなとか、良い循環に入ったから「磨」かな・・・と、自分で自分を判断する基準になるとお考え下さい。

論語もこういう読み方をすると若干面白くなると思いますので、ご紹介致しました。以上でございます。有難うございました。